

フランダースの犬とルーベンス ベルギー

遠い昔、子供と一緒に見たTVアニメーション「フランダースの犬」は忘れられない番組である。幼い二人の息子が画面を見ながらしきりに涙を拭いているのを見て、こちらもついもらい泣きをしながら見たものである。

主人公の少年ネロと愛犬パトラッシュの物語であった。絶望に打ちひしがれたネロは、アントワープの大聖堂に飾られているルーベンスの名画を一目見ようと吹雪の夜に漸くたどり着き、愛犬パトラッシュと抱き合い凍えながら名画の前から昇天していくという悲しすぎる物語であった。

“フランダースの犬”は1872年英国人ウィーダの作であるが、日本では明治41年（1908年）、日高善一訳で出版されて以来、児童文学書として多くの人に親しまれてきた。

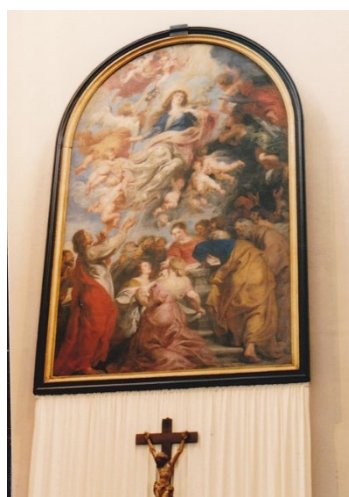
ルーベンスは高名な画家で多くの傑作を残しているがフランダースの犬に描かれている“キリスト降架”をいつかこの目で見てみたいと思っていた。

欧州出張のおり、週末を利用してアントワープへ出かけた。何はともあれあの絵の飾られているノートルダム大聖堂へと急いだ。

遠くから見えてきた大聖堂は修復中で、絵を見られないのかと思い一瞬どきりとしたが、ルーベンスが描いた聖母被昇天は正面祭壇に、その横には目当てのキリスト降架が飾られていたのである。それは想像していた以上に大きく色彩も鮮やかな絵であった。長年の夢がかないやっとならんと対面できてしばらくたたずみ見入った。



ノートルダム大聖堂



祭壇画・聖母被昇天



キリスト降架

ピーテル・ハウル・ルーベンス（1577年～1640年）は、バロック期（16～18世紀のヨーロッパの華麗な芸術様式）を代表する画家であり、同時に優れた外交官としても大いに活躍した。名門の家系である父親のヤン・ルーベンスは法律家であった。ルーベンスはドイツのジューゲンで誕生するも、父親を亡くし10歳の時には親の故郷アントワープに移り住んだ。

幼いころから聡明であったが特に美術に関しての天分に恵まれ早くから美術への関心が高かった。21歳で画家ギルドに登録され独立した画家として歩み始める。1600年には23歳となり8年間イタリアへ留学する。イタリアではルネッサンスの巨匠たちの模写を精力的にこなし、ローマでは

彫刻や絵画を丹念にみながらその画法などの研究に没頭した。レオナルド・ダ・ヴィンチ、ミケランジェロ、ラファエロ、カラヴァッジョ等の作風を学びまたギリシャ彫刻ラオコーンなどにも大きな影響を受けている。

ヴェネツィアのマントヴァ公から貴族に列し画家として仕えるよう誘いがあり応諾する。この頃から画家として絵の注文が数多く舞い込む。

病気の母を看取るためアントワープに帰国するも死に目には会えなかったが、既に故郷でも画家としての高い評価が定まり絵の注文が引きも切らず入り多額の収入を得ていく。

マントヴァ公の外交官としてデビューし、スペインのフェリッペ国王に拝謁している。そしてフェリッペ国王のために多くの作品を描いた。

1611年自警団からの依頼を受けアントワープ大聖堂の聖母被天昇、キリスト降架を完成させる。1624年スペイン国王フェリッペ四世から、また1630年にはイングランドのチャールズ一世からナイトの称号を授けられるなど、円熟味を増したルーベンスは画家として、また外交官として大いに活躍するのである。1628年～1629年にかけて8カ月間マドリッドに滞在し、スペインの宮廷画家であるベラスケスと親交をもった。

ルーベンスは7か国語を自由に操り、高い教養を身に着けていたが、その上容姿端麗、温厚な人柄で能弁であった。このような優れた資質は画家であると同時に外交官としてのルーベンスの来し方、行く末に大いに役立ったに違いない。



エレネ・フルマンと二児（ルーブル美術館）

ルーベンスの描く絵画の画題は祭壇画などの宗教画、肖像画、風景画など様々であった。また絵は華麗な色彩に彩られそして多くの人間が描きこまれている。人物はいずれも肉感的に描かれている。代表作は24枚の連作でルーブル美術館に展示されているフランス王妃「マリー・ド・メディシスの生涯」である。一方ルーベンスは最初の妻イザベラをモデルに傑作を描いたがイザベラを亡くし、大きく年の差が開いたエレネ・フルマンと再婚し「毛皮をまとうエレネ・フルマン」などの優れた絵を残している。

独りキャンバスに黙々と向かう多くの画家と違って、ルーベンスは工房形式をとっている。



アントワープのルーベンス邸の門

大聖堂でネロ少年がみた絵を目に焼き付け、その足で厳めしい門構えの工房を併設した豪壮なルーベンス邸を訪れた。工房には後に名を残すイギリス人画家ヴァン・ダイクもいたが100人もの弟子や助手を擁していたという。あたかも工場の流れ作業のように、絵画も弟子たちが分担して殺到する注文に応じたのであろうか。

高名な多くの画家を仮に個人営業者に例えるならば、一方のルーベンスは絵を生み出し商う企業経営者とでもいえるのだろうか。

余談であるが、思うにルーベンスは画家というより商才にたけた辣腕経営者の趣が強いように感じるのである。正直一体どの絵が、絵のどこがルーベンス自身の手によるものか、彼の絵画を見るたびに疑問がよぎるのである。